

初期仏典における性差の一側面
——arahat という語に注目して——

唐井 隆徳（佛教大学）

仏教における女性観をテーマとする場合、多くの人にとって関心の高い問題は、「仏教は女性を差別するのか、それとも平等に扱うのか」という点であろう。ただし、「女性」といっても、女性一般を指すのか、女性の出家修行者を指すのかによって、その扱いも異なると考えられる。そのため、本発表では、初期仏典における女性観という広範なテーマを設定することは避け、男女の出家修行者（以下、比丘・比丘尼とする）に焦点を当てる。

初期仏典において、女性差別的な記述があることはこれまでに指摘されてきており、初期仏典は男女平等を説いているわけではない。そのことは比丘尼についても同様であるが、その一方で比丘と比丘尼を平等に扱っている事例も確認される。その際に屢々引用されるのは、比丘尼僧団成立に関する律蔵中の記述である。そこに示される八敬法は、比丘尼僧団が比丘僧団に従属することを示す規則であるという点で差別的と言える。一方、それが制定される際に「女性も出家して修行すれば阿羅漢になり得る」と宣言されていることから、覚りの資質については男女平等であると見做すことができる。本発表では、この「女性も阿羅漢になり得る」という点に注目する。

まず、覚りの資質に関する男女平等性を改めて確認するが、初期仏典における女性観の一端を議論するためには、男女の共通点よりも、むしろ性差について明らかにしなければならない。先に述べたとおり、「女性も阿羅漢になり得る」と言えるが、阿羅漢（arahat）という語の扱いに関しては、比丘・比丘尼間で異なっており、比丘尼は arahat と呼称されない傾向にある（発表内で述べるように、一部例外もある）。比丘・比丘尼間におけるこのような差異が認められると、そこに何らかの差別があったのではないか、という視点から研究がなされる場合がある。実際、arahat については、一部の先学たちがジェンダーの問題と結びつけて議論していることから、阿羅漢（arahat）という語を検討することは、初期仏典における女性観を論じる際にも有益であると思われる。そこで本発表では、パーリ伝承の初期仏典における arahat の用例を中心に調査することによって、阿羅漢になることができるはずの女性が arahat と呼称されにくい背景について考察し、そこに社会的偏見があったのかどうかについて考えてみたい。

キーワード：パーリ聖典、比丘尼、阿羅漢